

日本生物工学会のゆくえ

第17代会長 飯島 信司



思い出

日本生物工学会は本年90周年を迎えるが、私が学会（当時は日本醸酵工学会）にはじめて参加したのは、ポスドク生活を終え名古屋大学工学部にお世話になった昭和59年だった。田口久治先生が会長で、大会も中之島の日本生命ビルで行われ、発表会場も2つか3つ、参加人数も数百人程度で宿泊も同じ場所、朝から晩まで一緒であった。アットホームな雰囲気、なつかしく思い出される。その数年の後には学会の発展とともに中之島の開催が困難となり、また学会の全国展開に伴い、1989年の名古屋を皮切りに徐々に全国各地で大会が行われるようになった。そんな折の1992年頃、当時副会長の今中宏先生のおとりはからいで宝塚にて理事、編集委員の合同合宿が開かれ、会名変更と英文誌の月刊化が審議された。活発にまた時には本音で議論し、夜は全員で酒を飲んだ後、大広間で雑魚寝をした。今考えると学会の体制も小さく、皆で意見が言いあえ風通しのよい懐かしい時代と言えるかもしれない。

学会の現状と新しい動き

このような生物工学の歴史を振り返ってみると、小規模な学会で小廻りが効き、また風通しがよく開かれた学会としての在り方を考えてきたこと、常に産業と寄り添い、物づくりを中心に実学の面で成果をあげてきたことなどが本学会の特徴であったと言える。現在、原島会長の指導のもと、学会の社会的存在意義を問い直し、産業と手をたずさえてという本学会の特徴を前面に出した企画が次々打ち出されている。流行に流されることなく、学会が支えるべき研究テーマを指定した年次大会時の本部企画シンポジウム、今年よりはじまった生物工学産業技術研究会、さらに東日本支部の賀詞交換会などがそのよい例であろう。

期待

これらはいずれも企業会員が企画・実行している。尽力していただいている企業理事の皆様には頭が下がる思いである。またこのように、産業界から学会への積極的参加を呼び、運営進めてゆくことができれば、物づくりの現場を見据えたさらなる学会の飛躍が可能と考える。これにより、我々大学の人間も産業界での問題をより理解できるようになるし、また産学での人事交流の活発化も期待できる。産学がペアとなり昔のように活発な議論をし、日本における物づくりの学会として公に提言を出してゆくようになりたいものである。日本における物づくりに疑念がわき、工学の在り方が問われている現在、このような産学連携の動きも大切と思われる。

学生諸君へ

産業界と大学が生物工学の将来を議論している場に若い人たちが参加すれば、企業のありようを深く理解することもできる。学生諸君にこのような機会がえられれば、人材育成という観点から企業にとっても学生にとってもメリットは大きく、現在の新卒採用制度に風穴をあけることができるかもしれない。

学会は学問の進展をはかり、社会へ広く利益を還元することを使命とすることはいうまでもない。それとともに20年前のあの雰囲気、仲間意識も大切と考える。異なる立場の人間が友達となり意見を交えるところから次の発展が見えてくる。学生諸君もぜひ議論に加わって欲しいものである。